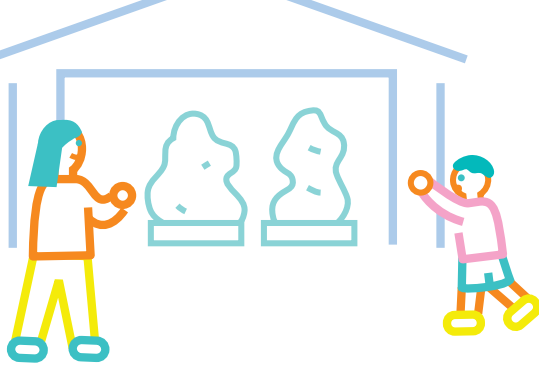
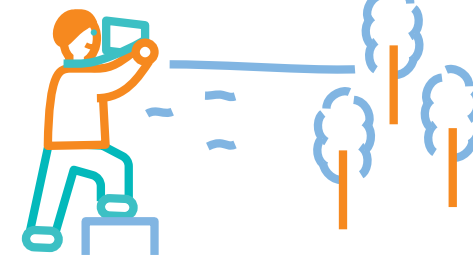


創造 トークス

2023.12.15 (金)

に

「空き家」を考えた



ARTS COUNCIL SHIZUOKA

創造 トークス

はじめに

アーツカウンシルしずおかは、社会の様々な分野において創造的な取組が展開される未来を見据え、アートとの関与を推進していますが、各分野にはすでに現場ならではの状況把握を元にした魅力的な取組が存在します。そして、それらの背景には、一歩踏み込まないと見えない分野ごとの課題や視点や知見の集積があります。そうした集積に触れ、アートとの接点を探るために、多分野の事例をテーマとしたセミナーシリーズ「創造トークス」を開催しました。

セミナーでは、テーマに関わる分野の専門家から現状や背景などをお聞きすると共に、アートの観点も持ちながら取組を実践しているゲストが登壇し、視点を変えることによって新たなアプローチを見出している事例の紹介もしていただいています。

「創造トークス」は、各分野で活躍される方々の創造性がより活性化され、新たな発想がひらかれるきっかけとなることを狙いとしていますが、同時に、その分野に普段関わっていない方々にとっても、社会の動向について新たな知見を得る学びの機会となれば幸いです。

事例紹介

4～17 ページ

クロストーク

18～23 ページ



「空き家」を考えた

社会でのアートを活用した取組の促進につなげるため、アーツカウンシルしずおかは社会の様々な要素とアートの関係を探るトークシリーズを実施しています。第3回は、空き家×アートをテーマとして開催しました。

総務省が公表した令和5年住宅・土地統計調査住宅数概数集計（速報集計）※1によると、全国に空き家は900万戸（1993年の約2倍）あり、国内の住宅総数6,504万7,000戸に対して13.8%を占めています。また、前回調査の2018年から5年間で51万戸の空き家が増えたという結果が出ています。空き家が増加することにより、治安の悪化、火災リスクの増大、衛生上・景観上の問題、地域の不動産価値低下等の影響があるとされ、改善が急務とされる社会課題です。

ダメージの少ない物件をリノベーションした住宅や店舗とする等の活用も今では珍しいものではなくなりましたが、アート界隈でも、全国各地で空き家や空き店舗を使ったプロジェクトが実施されています。アートが関わった事例では、使用する空き家が必ずしも居住に適した状態である必要はなく、プロジェクトの目的や作品のコンセプトによっては、ボロボロの状態で使用されるケースもあります。それらを踏まえ、アーツカウンシルしずおかは、アーティストの視点や発想が関わることによる空き家の活用の特徴を見出そうという取組をスタートさせ、その一環として今回のセミナー実施に至りました。

前半は、「fresh air クリエイティブ人材による空き家等活用モデルプログラム」を展開した県内4団体とアーティストたちからの事例発表と共に、先進事例として取手アートプロジェクトでの空き家を使った紹介を行いました。後半は、取手アートプロジェクト包括ディレクターの羽原康恵さんと、県内で空き家活用、定住移住などの事業に携わる山田知弘さんによるトークを開催。閉会後は、会場となった森町の商店街にある一般社団法人モリマチリノベーションが手がけたリノベーション物件の見学会を実施しました。

※1 令和5年住宅・土地統計調査住宅数概数集計（速報集計）結果（総務省） https://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2023/pdf/g_kekka.pdf

セミナー 空き家×アート セミナー 空き家の新たな価値を見出す・ひらく

[日時] 2023 年 12 月 15 日(金)
14:00 ~ 16:00 (見学会 17:00 ~)
[会場] 森町文化会館小ホール
(周智郡森町 1485)
[入場料] 無料
[来場者数] 61 名
[主催] アーツカウンシルしずおか

fresh air モデルプログラム 事例紹介

fresh air クリエイティブ人材による空き家等活用モデルプログラム (実証実験事業)
一般社団法人モリマチリノベーション × 遠藤 七海 (ダンサー)
合同会社 so-an × 癸生川栄 (eitoeiko) (ディレクター)
龍山未来創造プロジェクト × スズキサチコ (美術家)
OKUSURUGABOARD × 吉野 祥太郎 (アーティスト)

先進事例紹介

取手アートプロジェクト「アートによる空き家活用の実践から見出したこと」
羽原康恵 取手アートプロジェクト包括ディレクター／アートマネージャー

クロストーク

「空き家×アート」を持続可能なものにしていくには
羽原 康恵 取手アートプロジェクト包括ディレクター／アートマネージャー
山田 知弘 有限会社日の出企画 代表取締役
立石 沙織 アーツカウンシルしずおか プログラム・コーディネーター

見学会 ※希望者のみ

モリマチリノベーション活用物件見学会
会場: pieces (周智郡森町森 305)

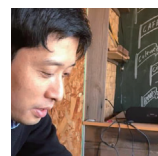
登壇者



羽原康恵
Habara Yasue

取手アートプロジェクト包括ディレクター／
アートマネージャー

1981 年高知生まれ、広島、三重育ち。特定非営利活動法人取手アートプロジェクトオフィス理事。筑波大学国際総合学類卒業、同大学院人間総合科学研究科修了(芸術支援学)。院在学時に取手アートプロジェクト(TAP)でTAP塾インターンとして活動。2007～08年(財)静岡県文化財団での企画制作を経て取手に戻り、事務局長のち現職。TAPの芸術祭型から通年型活動への転換期を担い、郊外でのアートプロジェクト実践を続ける。



山田 知弘
Yamada Tomohiro

有限会社日の出企画
代表取締役

住宅会社勤務・税理士事務所勤務を経てUターンで三島市へ。相続・住宅・創業をサポートするFP事務所「日の出企画」を開業。街に住む人と働く人が増えるまちづくりを目標にすえ、5年前にアパート購入し大家業をスタート。沼津市内2カ所、裾野市内1カ所に公共連携型のシェアスペースを展開し、移住、創業推進と空き家対策を担う。2019年経産省創業機運醸成賞、2019グッドデザインしずおかコト部門受賞、静岡県地域づくりアドバイザーなど。2022年度よりアーツカウンシルしずおかアソシエイトに就任。

fresh air 事例紹介



一般社団法人モリマチリノベーション

森町森地区を中心に、多様な主体と連携しながら次世代につながる魅力ある街づくりを地域ぐるみで推進する団体。遊休物件等を活用した魅力的な場所を作り、“その空間を育てていける街”の実現を目指してエリアリノベーションを進めることを目的に活動する。



photo by ©あいにや

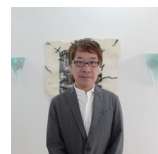
遠藤 七海／ダンサー

1997年東京生まれ。小学生でダンスを始め、中高時代に演劇、大学でコンテンポラリーダンスに出会う。2020年、立教大学現代心理学部映像身体学科卒業。日常の振り付けられた身体に着目し、とりわけ食とアートをテーマに模索中。制作者としても舞台芸術に携わる。ダンサー杉本音音とのユニット Ne Na lab ではコロナ禍の新しいラジオ体操をテーマにした映像作品『ラジオ体操第1.1』や調理時間を上演時間にした『食べるからだ』などを発表。「コオドリ」として間借りカレーの出店やイベントでのフード提供も行う。



合同会社 so-an

古き良き港町の家屋を地域資産として捉えなおし次世代産業へ継承していくことをミッションに、伊豆稲取の町全体を一つの宿と見立てた滞在サービスを提供。空き家を再生した拠点運営事業を軸にして地域のファン増加を目指す。拠点として宿泊施設「湊庵 -so-an-」を3軒、シェアキッチン、シェアオフィスの合計5軒を同地区内で運営。都市部の企業や教育機関へ向け、地域の多様な資源を組み合わせたオーダーメイドの滞在コーディネート事業を展開している。



癸生川 栄 (eitoeiko) /ディレクター

1972年千葉県生まれ。早稲田大学を卒業後、2009年東京神楽坂に eitoeiko(エイトエイコ)を開廊。展覧会をキュレーションしながら、美術家と協働し国内外の公共空間やギャラリーでの展示を補助、制作、企画する。参加展に「来るべき世界—科学技術とAI、人間性」(青山学院大学シンギュラリティ研究所 2019)、「CATastrophe」(QiPO メキシコ 2023) など。アーツカウンシルしずおかの第1回、第2回のマイクロ・アート・ワークショップに参加し、下田市と松崎町でリサーチを重ね、第1回「まづぎきオハナ・マルシェ」(2023) ではデザイン等を担当する。



龍山未来創造プロジェクト

浜松市天竜区龍山町は、人口470人。2014年に最後の学校が閉校したことで、子育て世代が流出し、移住促進も難しく人口減少の一途を辿っている。結果60歳以下の将来を支える人材が不足し、未来の姿を想像することが難しい状況となっている。龍山未来創造プロジェクトは、この状況下において龍山の未来を繋ぐことを目的に、「(1) 龍山町魅力発信」「(2) 町の資産を形に残し、繋ぐ」「(3) 町の楽しさ創出、活性化」の3つの活動を行っている。



photo by ©中村ヨウイチ

スズキサチコ／美術家

京都精華大学大学院芸術研究科造形専攻修了。その後、ギャラリー白を中心に関西で作品発表を行い、障害のある人のアート活動のサポートに従事。2011年、静岡県西部へ転居。樂土の森創設25周年記念|現代美術展 タイムスクランブル 2021 - 2022、2020年度浜松市鴨江アートセンターアーティスト・イン・レジデンス後期採択などで、制作発表を行う一方、「こどもアトリエ Tette」を、2014年からサークル時代含め8年間主宰。



OKUSURUGA BOARD

「おもしろいこれからをつくる」をテーマに活動する任意団体。豊かな自然環境下で営む地域の暮らしの風景など、「写真」をキーワードに、魅力を国内外に発信、地域に足を運んでもらう仕組み作りを行う。当該地域の主産業は農漁業で、中心市街地から離れた都市開発の影響をうけていないエリア。街並みが残されている場所を不便と捉えるか、市街地とは違う時間の流れを感じられる事を他とは違う魅力あふれる場所として捉えるか。写真好きから見ると、「他とは違う」はおもしろい興味の湧く場所。写真好きが国内外から集まってくる場所になればと、日々いろいろな可能性を模索しながら活動している。



吉野 祥太郎／アーティスト

1979年生まれ。吉野祥太郎の主題は「土地の記憶」。国内外において、土地と人との関わりをたどりつつ、その土地を成立させている記憶との対話を通して、大規模なインスタレーション作品や立体作品などの制作を行っている。また彼は、土それ自体に記憶が堆積していることを強く意識し、土を表現素材としてもちいるほか、記憶の層としての土を地面ごと持ち上げ「立てる」というインスタレーションも世界各地で実践している。吉野はこれまで、来訪者として各地に赴き、新たな視座からその土地の記憶を見だし、大切に持ち上げることによって、作品へと具現している。

進行

立石沙織 Tateishi Saori

アーツカウンシルしずおかプログラム・コーディネーター

A部門：森町

一般社団法人モリマチリノベーション
代表 小倉崇代



遠藤七海（ダンサー／アーティスト、制作者、料理人）

心をリノベーションする、
食とダンスのイベント「森町ディスコ」



小倉崇代

遠藤七海

【地域・団体】明かりが減った商店街と、リノベーション

秋葉街道、塩の道の宿場町として栄えた森町は、舞楽や祭りなどの伝統文化が大切に受け継がれ、豊かな自然と古き良き町並みが残る地域だ。しかし近年は、町の中心にある商店街の明かりが徐々に減り、空き家や空き店舗の増加が地域の課題となっている。

モリマチリノベーションは、町内で増加する空き家や空き店舗を改修し、森町の活性化を図ろうと地元有志3人が2021年1月に設立した一般社団法人だ。町全体をエリアリノベーションすることをミッションと考え、ただ建物を改修して新しいものを加えていくだけでなく、森町に諦めの気持ちを抱いている人たちの心もリノベーションできたらと活動が続けている。

2021年7月には、地域に愛されてきた旧レコード店で空き家改修のワークショップを開催し、地元の人や移住検討者など空き家活用に関心がある人たちと一緒に改

修を開始。シェアキッチンやブックスペース、移住相談ブース、宿泊所などの複合施設「pieces（ピースーズ）」の開設を進めてきた。

アーティストと新しい化学反応を起こす

今回は、「pieces」の建物内でまだ手つかずとなっている3部屋を活用し、クリエイティブ人材と共に魅力ある施設を作り上げることを目的にプログラムに応募。クリエイティブ人材のマッチングにおいて、建物の改修に関わらないダンサー／アーティストの遠藤氏が選出されたことは想定外だったが、〈森町に暮らす人たちの気持ちを一番に考え、コミュニケーションの中から新しいものを創出する〉というコンセプトで遠藤氏と一致。新しい人材が加わることで、施設に新しい化学反応が起こることを期待して、プログラムの実施を決定した。

【プログラム内容】森町のリサーチを開始

遠藤氏は、ダンスと食の領域で企画やパフォーマンス作品の発表、コミュニティの開拓を行うダンサー／アーティストだ。また月1で間借りのカレー屋を営業するなど、その活動は多岐に渡る。森町の滞在は計3回予定しているが、すでに終了した1回目の滞在では、企画に先立ち森町のリサーチを実施した。滞在中は「遠州森のまつり」の伝統ある舞楽奉納や、勇壮な屋台の練りを見学。祭りで賑わうハレの日の森町と、静かな日常の姿に戻った森町の両方を体感しながら、地元の人との交友を深めた。

食とダンスのイベント「森町ディスコ」

地元の野菜を使ってカレーを作り、地域の人たちと交流を深める。

遠藤氏は、視察を通じて浮かび上がってきた“シャッター街になってしまった商店

街の賑わいをもう一度味わいたい”という住民の声と、“「pieces」を定期的に開かれた状態にして、人が集まる場所にしたい”というモリマチリノベーションの要望を元に、新たな空き家活用の方法を探る食とダンスのイベント「森町ディスコ」を3つのテーマで企画した。1つ目は「pieces」のシェアキッチンを活用した2日間限定のカレー店「出張コオドリ」の営業。地域の人たちと交流を深めることを目的に、地元の野菜を使ってカレーを作って販売する。2つ目は、「出張コオドリ」での交流から出てきた地域の人々の「やってみたいこと」を遠藤氏によるプロデュースでやってみるトライアルイベント「コオドリバ」。3つ目は、ダンスを通じて森町の新しい見方を考えるための、ダンスのワークショップとダンスパフォーマンス「森町と踊る」。今回のプログラムでは、これら事業を通じて、森町の人たちが「pieces」を使ってコミュニケーションの輪をひろげ、自分たちでまちを盛り上げていけるよう「自家発電の火おこし」役を担い、「pieces」が森町の住民が集まる場所、活用できる場所になることを目指していく。



A部門：東伊豆町

合同会社 so-an 代表社員 荒武優希



癸生川栄 (ディレクター)

周遊型アート・フェスで、
地域遺産を稲取の文化醸成拠点へ



荒武優希

癸生川栄

【地域・団体】古き良き港町の暮らしを体感する町宿

東伊豆町稲取地区は、伊豆を代表する温泉地として知られる人口約 5,000 人の小さな港町だ。この地区で活動する合同会社 so-an は、古き良き港町の家屋を地域資産として捉え直し、次世代に継承していくことをミッションに、自治体と一緒に空き家の利活用に取り組んでいる。空き家改修のほか、リノベーション物件を活用した稲取の暮らしを体感できる宿や、シェアキッチン、シェアオフィスなど、5 棟の施設を運営。5 棟のうち 4 棟は、お互い徒歩 10 分圏内に位置し、近隣の温泉や飲食店を案内することで、町全体を楽しんでもらうような拠点運営を展開している。また、来訪者のニーズに合わせて漁港に案内するなど、まちの魅力を伝える滞在プランも提供している。

アートの力で町の新たな魅力を引き出す

so-an の活動が地域に浸透する中で、地元の人から稲取地区の偉人として知られる西山五郎の家系が所有する邸宅が取り壊されそうになっているとの相談を受け、この邸宅の賃貸契約を締結。稲取の地域資産として残す方法を模索したものの、活用の糸口が見つからないままとなっていた。

so-an は、アーツカウンシルしずおかの主催事業「マイクロ・アート・ワーケーション」に参加しており、旅行者とは違ったアーティストの視点が、地域の新たな一面を掘り起こしてくれると感じていた。そこで、クリエイティブ人材の力を借りて、アートによる空き家活用の道をひらくことができないかとモデルプログラムに応募。マッチングされたアートディレクターの癸生川氏と一緒に、旧西山邸が今後継続的に稲取の新たな魅力を引き出す文化醸成拠点になるよう、アート活動や展示が可能な飲食・宿泊スペースを目指してリノベーションを進めることになった。

【プログラム内容】活用プランの検討を開始

プログラムではまず、旧西山邸の成り立ちを紐解き、温泉開発の歴史や大島の噴火、伝統文化など、地域への理解を深めるところからスタートした。また今後この建物を残すのか解体するのかといった、未来の姿を考える必要があった。さらに活用する場合の邸宅へのアクセスや、駐車場の問題、建物の損傷度など、課題の洗い出しを行った。

西山五郎と旧西山邸

西山五郎は、明治時代に東京から移住し、西山病院の初代院長として稲取に近代医療をもたらした人物として知られている。特に上下水道の整備で伝染病撲滅に尽力し、地域に貢献した。また青梅から「無音踊り」の職人を招いて、稲取の郷土芸能となっている「^{ばかばやし}馬鹿囃子」の起源をつくったことでも知られる。

旧西山邸は、五郎の末子俊郎とその家族の住居として1959年に建造された。大学卒業後に東京で生活していた俊郎が、父の死去に伴い稲取に帰郷した際に建てた住居だ。

周遊型アート・フェスでまちの魅力を体感

その他、稲取中学吹奏楽部が人数減により廃部を予定していることなど、リサーチによって地域の課題や魅力の掘り起こしを実施。その結果を元に、旧西山邸や so-an の施設などをメイン会場に、稲取地区を歩いてアートとまちの魅力に出会える「イナトリ・アート・フェス」の開催が決定した。このアート・フェスでは、アートとは何かを地域の人たちと一緒に考えることができるよう、外からアートを持ち込むのではなく、地域の人たちがそれぞれの職能を生かして作家と協働で作品を作り上げることにした。またフェスの開催に向けてシンボルマークを考案し、イベントを盛り上げていく予定である。



B部門：沼津市

OKUSURUGA BOARD 主宰 齋秀雄



吉野祥太郎（彫刻家・アーティスト）

50年以上放置された空き家から、
「奥駿河」の魅力再発見する

齋秀雄

吉野祥太郎

【地域・団体】写真で切り取る「奥駿河」の新しいイメージ

沼津市の中心市街地から少し離れた、駿河湾沿岸の三の浦（静浦・内浦・西浦）一帯は、山と海に挟まれた自然豊かな地域で、漁業・観光業・農業が中心のまちだ。富士山を望む駿河湾の奥を、地元の方々は「奥駿河湾」という愛称で呼んでいることから、OKUSURUGA BOARD では、この地域を「奥駿河」と呼び、“おもしろいをこれからつくる”を信条として、写真をキーワードに地域の外から足を運んでもらう仕組みづくりに取り組んでいる。

2017年に結成されたOKUSURUGA BOARDの活動は、この地域の〈富士山・駿河湾・みかん畑〉というステレオタイプのイメージを一新し、今までにない新しいイメージを写真で切り取ることから始まった。地域資源を掘り起こすツールとして写真を活用し、瓦屋根の古い街並み、地域のみかん小屋、伊豆石を土台にした古い木造建築、地元の大きな神社、風になびく大漁旗、季節の花々など、写真好きの人たちが惹き

つけられるような〈撮るのが楽しい場所〉を丁寧に拾いあげ、「奥駿河」の新しい魅力を国内外に発信している。

築100年の旧郵便局から魅力を発信

また旧郵便局だった築100年以上の木造建築をリノベーションし、〈地域と外〉、〈人と人〉、〈これまでとこれから〉を結ぶ場所として、ギャラリー／コミュニティスペース「omusubi」の運営を開始。地元作家たちの展示会や、農産物の販売会などを開催し、奥駿河の魅力を知ってもらう場所となっている。

【プログラム内容】丘の上に建つ50年以上放置された空き家

今回のプログラムには、写真を撮る活動の中で新たに発見した空き家の活用方法を

一緒に考えてくれるクリエイティブ人材を求めて応募。奥駿河湾を見下ろす丘の上に建つ、50年以上放置されていたボロボロの物件を活かし、何かおもしろいことができないかを模索する。

■ 地域の中から活性化するための空き家活用

プログラムに参加する吉野氏は、〈土地の記憶〉をテーマに、国内外で彫刻やインスタレーションの作品を発表してきたアーティストだ。これまで数多くの芸術祭に参加し、“外から人を呼び込み地域を活性化させたい”という動機で開催された芸術祭の失敗例を見てきた。今回の空き家活用プログラムにおいては、外からではなく、地域の中から活性化するための空き家活用でなければならないと強く意識し、長期にわたってこのプロジェクトに関わることを決めた。

■ 作品を通じて地域と特別な関わりを築く「聖地巡礼」

「奥駿河」のリリースでは、地域と来訪者との関わり方について、面白い事例を見つけた。「奥駿河」を含む沼津市は、あるアニメの舞台となったことで、多くのファンが訪れる聖地としても知られている。彼らは、単に聖地だから観光に訪れているわけではなく、本当にその地域を愛して訪れていた。コロナ禍には声をかけ合って訪問を控えるなど、彼らがアニメ作品を通じて地域に特別な想いを持って関わっていることは、大変興味深い事例であった。

■ まちの魅力を体感し、伝えていくために

吉野氏のリリースは始まったばかりだが、空き家の敷地の草刈りやドローン撮影など、何度か地域を訪れ、丘の上からの素晴らしい眺望に空き家の可能性を感じた。

地域活性化にアーティストが果たす役割は、そこに来て作品をつくること以上に、その場所の魅力をアーティスト自身が体感し、それぞれのアーティストの方法で発表していくことにある。今後もリサーチを続け、物件の活用方法を考えながら、「奥駿河」の魅力を再発見し、その魅力を伝えていく。



B部門：浜松市

龍山未来創造プロジェクト 代表 鈴木のぞみ



スズキサチコ（美術家）

龍山の未来をみんなで考えるための
【アートラボ×泊まれる施設】

鈴木のぞみ

スズキサチコ

【地域・団体】子どもがいないまちと、アーティストの親和性

かつて静岡県最後の村と呼ばれていた浜松市天竜区龍山町（旧磐田郡龍山村）は、町のほとんどを森林と川が占め、駅や宿泊施設もなく観光客もほとんど来ない静かな地域だ。鉱山で栄えたピーク時は1万3,000人だった人口が、2014年には最後の教育機関がなくなったことで子どもや若い世代がいなくなり、現在458人となった（2023年12月現在）。この3年だけでも100人が減り、このままでは10年後、20年後の未来を考えるのが難しい状況にある。

龍山未来創造プロジェクトは、龍山町で失われつつある地域資産や文化の継承を目指し、地域の魅力発信やまちの資産を形に残し繋ぐ活動、まちの楽しさ創出、活性化につながる活動を続けている。また2021年からマイクロ・アート・ワーケーションに参加し、2022年と2023年には廃校を舞台に、アートイベントを開催。アートを通じてまちの暮らしや文化、歴史などを形にし、そこから住民とアーティストがさま

ざまなコミュニケーションを生み出すことができるようになった。今では高齢者も「マイクロ・アート・ワーケーション」という長い言葉を口にするようになり、アーティストたちに気軽に声をかけるようになった。また、地域の〈無くなったもの〉や〈消えゆくもの〉の気配に思いを巡らせることができるアーティストと、過疎地域の親和性の高さを発見できたほか、地域住民に来訪者を受け入れる基盤ができ、龍山に寄り添ってくれるアーティストや活動に参加するメンバーも増えた。

【プログラム内容】地域の未来を描くきっかけづくり

そのような変化が見える一方で、アーティストの創作スペースや地域のイベント開催の場として継続的に使える空き家がないため、今回のプログラムに応募。天竜川本流が見える場所に建つ空き家物件を対象に、美術家のスズキ氏と活用プランを検討することになった。クリエイティブ人材からの提案として空き家活用の道をさ

ぐることで、地域住民が地域課題に目を向け、地域の未来を描くきっかけとなることを目指す。

龍山町のリサーチを開始

プログラムに参加した美術家のスズキ氏は、龍山の風景、記憶、文化に触れることを目的に、10月から11月にかけて10日間の視察を実施。節句の時期に揚げる「ぶか飴」やダム建設で沈んだ瀬尻地区は、この地域の人々の中にさまざまな記憶とともに残っていることがわかった。

最初に訪れた龍山森林文化会館では、1977年7月から続く村民文集『さかみち』を発見。現在も年1回発行している文集には、龍山の子どもやその親、学校の先生など、地域のさまざまな人が寄稿し、温かな地域交流が記されていた。

次に、手作りの郷土料理を提供する店「ドラゴンママ」で、季節の行事食や郷土料理を体験する講座に参加。講座を考案した世界遺産の会の方が、その後講座を「ドラゴンママ」に託し、現在は参加者として交流を深めていることを知った。

また龍山は多くの民話が残し、その民話の文献などを丁寧に収集・保管している中澤英雄氏と出会った。中澤氏は、縄編みの名人で、地元や浜松市内の神社のしめ縄を編むほか、たこ用の美しい麻ひもを編んでいる。

生きている今を重ね合わせられる場所

スズキ氏は、これらの視察を通して、地元住民やアーティスト、地域出身者など、さまざまな人たちが既存の枠を超えて語り合い、共に時間を過ごせるオルタナティブな場所の必要性を実感。〈生きている今を重ね合わせられる場所〉として、宿泊できる龍山アート・ラボ「龍山のおうち」を提案した。ここでの活動が、将来的に関係人口の創出につながり、人や文化の循環と熟成が育まれると考えた。



先進事例紹介

取手アートプロジェクト 「アートによる空き家活用の実践から見出したこと」

羽原 康恵（取手アートプロジェクト包括ディレクター／アートマネージャー）



立石 4チームの皆さん、発表ありがとうございました。どのチームも、クリエイティブ人材が地域の状況を丁寧に聞き取っていこうという姿勢や、地域住民の方々と信頼関係を結んでいこうという日々の努力が伝わってきました。そうした地域との関わりについてもう少し掘り下げていきたいと思い、茨城県取手市から、取手アートプロジェクトオフィス 包括ディレクターの羽原康恵さんにお越しいただきました。羽原さん、よろしくお願ひいたします。

羽原 はい、こんにちは。もうこのまま議論に突入したいほど熱い発表でした。そういう方たちが地域に点在していくのが、このプロジェクトの目指すところなんだろうなと感じました。

典型的な「郊外」のまち

少しだけ取手のケースのご紹介のお時間を頂きたいと思います。

私は茨城県の取手市で1999年から続いている取手アートプロジェクト（以下、TAP）の事務局で長年活動を行っています。取手市は高度経済成長期にベッドタウンとして開発された人口10万余りのまちです。上野まで電車で35分という場所で、「平成の大合併」で田畑の多いエリアと郊外の新興住宅地が合体したような地域です。都

心で働くために移り住んだ方がほとんどなので、海外も含めていろんなルーツを持つ方たちがひとつの場所で暮らしています。

取手アートプロジェクト

もともとこのプロジェクトは、市内の東京藝術大学取手キャンパスに、先端芸術表現科という現代アートを扱う学科ができたことをきっかけとして、大学主導に行政・市民が関わる形で始まりました。今までになかった表現を開発・開拓していこうというモチベーションを持った芸術家たちに、まちづくりに強い関心を持った市民が合流し、まずは〈芸術祭型〉のプロジェクトとしてスタートを切りました。

取手市×市民×大学で運営

現在は取手市、市民、東京藝術大学の三者が共同で運営しており、来年度で25年になります。私自身は2010年に有志の市民が立ち上げたNPO法人に所属しています。活動体制としては、TAPという大きな活動の中に、幾つかのアートプロジェクトが並走し、それぞれのプロジェクトにアーティストがパートナーとなり、老若男女、い

ろいろな属性の方と活動するという仕組みをつくっています。

アートプロジェクトの変遷

これまでの活動には何度かターニングポイントがありまして、活動内容もガラリと変えています。99年からの12年間は、まちなかにアート作品の展示を展開して、ある期間だけアートに触れられるというような、いわゆる芸術祭型で実施していました。これはこれで、アーティストたちがまちなかで実現してみたいことを、いろいろな文脈を読み取って実践するという意味では、まちの経験として蓄積できたと思います。

ですが2000年代に入ると、どこの自治体でもアートプロジェクト、アートフェスティバルが行われるようになりました。そこで取手では、不特定多数に向けた芸術祭型のプロジェクトはやめて、1人だけだろうと必ず顔が見える相手とアートプロジェクトをやるという方針に転換しました。この時からTAPは、見に来てもらうものではなくなりました。



空いて困っている場所の話が集まってくる

2010年以降は、いろいろなルーツの方がひとつところに住んでいる〈郊外のまち〉をテーマに、「アートのある団地」というコアプログラムと、農と芸術をつなぐという意味合いをもった「半農半芸」というコアプログラム、この2つの軸で活動しています。ここから、今回のテーマにつながる、空いている場所にTAPが入り、そこを地域の方たちと芸術家と一緒に運営していくようなかたちにシフトしていきました。現在は市内に幾つかの活動拠点を持って、いろいろな分野の方たちと協働させていただいています。

皆さんはすでに現場で体感されていると思いますが、アートプロジェクトには、すでに誰かがいる場所、使われている場所の話はあまり持ち込まれません。基本的には、空いていて困っている場所や使わない場所の話が集まってきます。つまり、今まで誰も見たことのないものを立ち上げることに動機を持つ、ちょっと変わった人たちがキーパーソンになり、価値が見出されない空き家や空いている場所に価値を見出すことにつながります。

当初は芸術祭型のプロジェクトとして、閉鎖した学生寮や污水处理施設で展覧会を開催してきましたが、2010年以降に活動内容が変わり、空き店舗や元農協事務所に、モノではなく、仕組みと人を持ち込んで、地域の方たちと一緒に活動していくようになります。

4つの活動拠点

現在、TAPには4つの活動拠点があります。1つ目は「藝大食堂」です。大学も人が減り、お金も減り大変だということで、2017年からNPOが受託し地域に開かれた学食として運営しています。2つ目は、団地の空き店舗をリノベーションしたコミュニティスペース「いこいの +TAPPINO」です。3つ目は、元農協事務所をリノベ

ションした多目的スペース「TAKASU HOUSE」です。4つ目は、駅ビルのテナントが大規模に撤退した場所のワンフロアで、アートを介した交流が生まれるような場所として運営している「たいけん美じゅつ場 VIVA」です。このような活動拠点と、市民がいつでも芸術表現に出会える仕組みをつくるベースプログラムで、その場に関わらない人にも、アートが後タインフラになっていくことを目指しながら活動をしています。

取手アート不動産／あしたの郊外

本日は、空き家と空き施設をめぐるケーススタディということで、TAP から3つをピックアップしました。3つのうち「取手アート不動産／あしたの郊外」は過去のプロジェクトで、「TAKASU HOUSE」とコアプログラム《半農半芸》、「いこいの+TAPPINO」とコアプログラム《アートのある団地》は現在継続中のプロジェクトです。「取手アート不動産／あしたの郊外」では、3、40年前に子育てをするために引っ越して来た人たちが住む郊外に、大きなサイズの空き家が増えてきているという状況を〈ストック〉と捉え、流通し直す「取手アート不動産」と、郊外の住み方を建築分野の専門家や市民とアートNPOが、アーティストをはじめとしたアイデア提案者と共に考える「あしたの郊外」という2つのプロジェクトを連動させ、国土交通省の事業として3年間実施しました。

「取手アート不動産」は、空き家をもとにアーティストたちが妄想したプランを先に示し、そのプランを実現したいという空き家オーナーとマッチングできた時に、建築の専門家も交えて作成する改修計画も含めてご提案するというような仕立てになっていました。陶芸窯のある家をつくるとか、昔の産婦人科施設をシェアスタジオにするといった事例が生まれました。

中でも面白かったのは、一般的な世帯には大きすぎる家を、住みながらどんどん減らしていく「減量住宅」という実験プロジェクトです。当初は、最後には建物を解体して無に帰すというプランでしたが、途中でオーナーさんから“ちょっと止めて”と声がかかり、

シェイプアップした状態の物件が、今もアーティストのアトリエとして使われています。

郊外がどんどん衰退していくと言われていますが、実は郊外のほうが、いろんな人が自由に暮らせるような余白があるのではないかとということで、郊外について考えたのが「あしたの郊外」でした。これらのプロジェクトは2015年で終了し、その後の実践はTAPが引き継いでいます。

TAKASU HOUSE と半農半芸

「TAKASU HOUSE」と《半農半芸》は、高須という都市内過疎が生じている地域での取組です。取手市の中でも人口が増えているエリアと減っているエリアがあり、高須は人口が減ってコミュニティバスさえなくなったエリアです。昔はここに農協の事務所がありました。それも撤退し、そのあとを今は我々が使わせていただいています。

ここではアーティスト・イン・レジデンスや、マルシェといったプロジェクトもしていますが、今日ご紹介したいのは、この地域のお父さんたちが18年前に試みて、そのまま眠っていた大風を、アートプロジェクトでの関わりを通じて復活させたという事例です。

大空風プロジェクト

この「大空風プロジェクト」は、高須の田んぼの藁を使って紙をすいて、このエリアの植物で着色した大風を空に揚げるというものです。コロナ禍で人が集まれなくなった時期に、せめて外の風が通る場所で風を揚げて、空でも見上げようということで、アーティストが一念発起し復活させました。高須地域のお父さんたちお母さんたちだけでなく、藝大で出会ったデザイナーさんが風のプロだったことや、紙すきを担当していただける版画家の方がいらしたことも方など、偶然メンバーが揃うことで実現に向かって動き出すことになりました。これを試みたのが2022年の1月です。地元の消防団の方たちや、その時見に来た人たちも一緒に引っ張って風を揚げました。この風は12畳です。

が、昨年度は6畳の風を復活させました。ただ昨年は風がなくてほとんど飛ばなかったので、今年はリベンジとして紙を1,300枚すいて、地元の方と一緒に500枚の連風アーチカイトをつくって揚げる予定です。

「いこいの +TAPPINO」とアートのある団地

「いこいの +TAPPINO」と《アートのある団地》は、2011年の震災の前年から現在まで続いているプロジェクトです。取手井野団地という、約2,200戸におよそ3,000人が住んでいる団地が舞台です。ここは空き店舗をリノベーションして、コミュニティカフェ兼、アーティストが不定期に通って来るプロジェクトの拠点として地域の自治会と民生委員とTAPが運営しています。市の高齢福祉事業の財源を活用して運営していますが、0歳でも100歳でも世代に関係なく、混ぜこぜになれるような場所になることを目指してスタートしています。ここではパートナーアーティストプログラムを実践しています。例えば北澤潤さんの「サンセルフホテル」では、団地の空き部屋をホテルにして、ホテルマンは青いリボンを付けた老若男女のこの活動を面白がって集まる人た

ちが務めています。深澤孝史さんの「とくいの銀行」は、今も続いているプロジェクトです。ここでも地域の人が敏腕銀行員として活躍し、団地にATMを置いて人の〈とくい〉を預かったり、引き出したりという役割を担ってくださっています。これは〈とくい〉を一旦預けると、ほかの人の〈とくい〉が自由に使えるといった仕組みで、これを運用しています。この銀行はネットバンキングも利用できますので、今日この会場にいるみなさんもぜひご利用ください。〈とくい〉を預けると、ある日突然“あなたの〈とくい〉”が引き出されました。つきましては毎月何日お暇ですか？”という連絡が来るかもしれません。このプログラムは、お金をもらわなくても誰かのためにやってあげて自分がうれしいことを集める、ということを基本にしています。これまでに、「脱出ゲームを考えます」という〈とくい〉を引き出して、「井野団地よん（イノダンジョン）」と題したイベントを開催するなど、〈とくい〉を引き出したさまざまな企画を行っています。

以上、駆け足でしたが、空いている場所にどんな仕組みを持ち込んで、アートプロジェクトとして実践しているかという3つの事例をご紹介しました。ご清聴ありがとうございました。



クロストーク

「空き家×アート」を持続可能なものにしていくには

羽原 康恵（取手アートプロジェクト包括ディレクター／アートマネージャー）

山田 知弘（有限会社日の出企画 代表取締役）

立石 沙織（アーツカウンシルしずおか プログラム・コーディネーター）

立石 ここからは、静岡県東部で空き家活用や移住定住支援、創業支援など、多岐にわたって事業を展開する有限会社日の出企画の山田知弘さんに加わっていただきます。

早速ですが、4組の事例発表を踏まえて、アートによる空き家活用だからこそのことや、その取組が持続可能なものになるにはどうしたらいいかという点について深めていきたいと思います。まずは、羽原さんから感想をお聞かせください。

羽原 私も現場で、地域の方たちやアーティストと、あでもないこうでもないとやっている立場なので、深く共感しました。そしてどの地域の皆さんも共通して地域にあるものをとても愛でていらっしゃるなと思いました。その愛でる対象は、地域の人たちには当たり前すぎてちょっと忘れていたり、何なら鬱陶しいものだったりするんです。でもそれを真っ向から堂々と愛でている人たちが、今まで見ていなかったものを一緒に見る伴走者になろうとしているんだなと感じて、頑張りましょう！と

いう気持ちになりました。

立石 そうですね。私も地域で活動した経験がありますので、4組の発表と今の〈愛でる〉という言葉に胸が熱くなります。山田さんはいかがでしたか。

山田 どの事例も、受け入れ側となる団体がすでに地元でしっかりと活動していることや、アーティストと一緒にやっていくというスタンスで地域に迎え入れられていることが印象的でした。僕も移住者や創業支援者など外部から来た方の支援をしていますが、地元で活動している方はどちらかというとと排他的になりやすいので、受け入れ態勢がこんなに整うことはなかなかないと思います。連携が素晴らしいなと感じました。

立石 排他的と言うと少し冷たく聞こえるかもしれませんが、一般的には、外から来る人に対しては〈お客さん〉

という意識が強くなってしまっているかもしれません。今回、この「クリエイティブ人材空き家等活用モデルプログラム」では、クリエイティブ人材の方々と地域団体の方が一緒に戦う同志となり、お互いのできることを出し合っていくといった相互関係が生まれることを期待していました。



空き家活用でアーティストに期待していること

立石 山田さんは空き家活用を専門に活動されてきて、最近ではアーティスト支援の取組も始めていますが、空き家活用におけるアート、あるいはアーティストに対して期待していることはありますか。

山田 僕はもともとハウスメーカーで新築アパートの営業をずっとやっていたので、そのことへの反動なのか、雨漏りしているような古い物件でも、基本的には使いこなそうという考え方なんです。ところがくどんな物件でも活用する」という面では、アーティストの方たちに圧倒的に負けたと思いました。アーティストの方は、住むことも、ビジネスとしての活用もできないような物件でも発案をしてくれるんですよ。僕としてはアーティストならではの発想力を発揮していただけると、さらに連携は面白くなるかなと期待しています。



立石 アーティストと聞くと、絵を描いたり、彫刻を制作したりといった、作品をつくる人をイメージすると思いますが、実は作品をつくる時だけではなく、その行為に至るまでの思考のプロセスや発想みたいな部分が、私たちの日常生活の気づきになることもあります。

羽原 私が10代の頃ですが、大学のデザイン系の研究室に潜り込んで、まちづくりの取組に付いて行ったことがありました。最初は“アート?”、“デザイン?”と怪訝そうだった地域の方たちが、一緒にものづくりをしたり考えたりする中で、目に見えて前のめりになっていく姿を見たんです。“あ、そうか。こうやって人は変わっていくのか”と実感し、社会にそういった小さな変化が起こせることに関わりたいと思って、地域の中でのアートマネジメントに踏み込んだという経緯があります。

アーティストと市民は表裏一体

羽原 アートプロジェクトにおいて、アーティストには社会的に変化を起こす期待がかけられていますが、アーティストと市民は表裏一体で、そこに一緒に活動する市民の方たちも同じように期待を背負っていると私自身は思っています。アーティストが何を見つけようと、どういう発想を提案しようと、“あ、それ面白い”思ってくれるホストの側の方がいないと実現はしないし、社会にも伝わらないところがあると思います。そこがアートマネジメントに立つ人の役割でもあると思いますが、アートの専門家だけでなく、先ほども90代のおじちゃん

が「マイクロ・アート・ワーケーション」と言えるようになったというお話が出ていたように、自分たちのパートナーとして、面白い視点でものを言う人、つくるために対話をする人たちのそばにいて、何歳であっても変化できるということなのではないでしょうか。社会が変化する前に、まず一緒に活動する市民の方たちに変化が生まれる、そんな変化を起こすきっかけとしてアーティストがいるといいのかなと思っています。

立石 そうですね。アーティストに限らないと思いますが、地域に関心を向けるアーティストたちが、目の前の人たちの言おうとしていること、抱えていることを知ろうと、会話を重ねる姿勢には、いつも尊敬の念を持ちます。

アーティストによる空き家活用の可能性

立石 アートでの空き家活用に寄せて、活用の仕組みについて考えると、先ほど山田さんがおっしゃったとおり、ビジネスとは出発点や目的など、何かが違うと思います。それによって、ビジネスではできなくても、アートならできる部分があるのかなと思います。例えばビジネスとして空き家を運営する場合には、ランニングコストやマネタイズができるかといった話から始まると思いますが、アートの視点ではそこからスタートしないということがあります。山田さんから、空き家活用とアートを結びつけてお話いただけますか。

山田 将来的に取り壊して新築を建てる予定のある物件では、取り壊すまでに、一時的に使わなくなる期間

があります。その期間に空き家を改修してビジネスとして利用しようとする、お金の無駄になるので実現しませんが、投資をせずに、倉庫などとして実験的に利用するとスムーズに動き出すことがあります。そういった物件にアーティストが数ヶ月や数年といった期限付きで、暫定的に利用する方法が、一番アーティストとの相性が良いと思います。好きに使っていいよ、だけどずっとじゃないよってというのはありかなと思いますね。

アーティストが空き家に 〈空気〉を入れる

山田 今回のプログラムには「fresh air」という名称が付いていますが、まさしく空き家を放置すると、空気の流れが生まれないので、建物の劣化がすぐに進んでしまうんです。そこをアーティストが一時的に使うことで、わざわざ建物維持のために窓を開けに行くようなことを

しなくて済むという面では、オーナーの負担軽減につながると思います。

立石 アーティストが使用することによって、空き家の保全にも期待できるということですね。

山田 そうですね。作品の発表だけでなく、落ち葉拾いを一緒にやってあげるとか、何か地域やオーナーとの関係性を持つと、さらに活用できる幅が広がっていくのかなと感じました。

空き家でコミュニティの経験値を 更新していく

羽原 空き家の何が問題かという、廃墟になって治安が悪くなり、もう手が付けられなくなり朽ちていくだけというような、放置期間が長ければ長いほどネガティブ度が増していくところだと思います。今お話を聞いて、空き家に空気が入ることで躯体（くたい）にとってプラスになることはもちろん、アーティストによって、今までになかった空気の入れ方や人の動きをつくっていると思いました。

また、空き家を暫定的に使ってみることによって、アーティストと地域の人たちが〈もしかするとあるかもしれない未来〉のお試しを、一緒に体験してみる実験の期間になっていると思います。〈お試し〉で立ち上がったコミュニティが続くかどうかは、その後の転がり方によると思いますが、試してみた経験値はその土地に残

ります。空き家活用によって家の躯体も保全されるという面もありますが、コミュニティが更新していくための実験の場としても、空き家はいい舞台として位置付けられるんじゃないかなと思いました。

立石 互いに信頼関係を築きながら、空き家活用に取り組んでみることで、地域の人たちとアーティストの双方に気付きがあって、化学反応が起きているといったことは、外からはなかなか見えにくいかもしれません。ただ、そういったものが蓄積されていくことは、地域のコミュニティの変化につながっていくそうです。

アートによる空き家活用を継続するには

立石 一方で、アートによる空き家活用を継続するとすると、難しいところがあると思います。そこで2人からアートによる空き家活用を持続可能性なものにするために、活用する時の重要なポイントをお伺いできればと思います。

山田 以前、ゴミがいっぱい溜まっている空き家をアーティストの方と活用することになった時、“ゴミの片付けだけやっておきますね”とアーティストに伝えたら“いえ、それは生活の歴史だから”と言われて驚いたことがあります。アーティスト側の話を深く聞いてみると、ゴミすらも建物のストーリーにして、そこから何かを生み出そうとしていたのが分かりました。アーティストも空き家活用を考える地域の人たちも、それぞれの常識の範囲で行動していますが、常識の幅がお互いに違うということを認識して、フラットな立ち位置で話し合うことが大切だと思います。





面白さを深掘りしていく

立石 常識や価値観は人によって違いがありますが、それがより顕著に出てくるのがアーティストなのかなと思います。また全然違う価値観に触れることの驚きと面白さがやみつきになるという部分もあると思っています。

山田 今、常態が空き家になってしまっている物件の中で、売るか貸すか決めている物件はごく一部なんです。今のお話の〈面白さ〉というのをもっと深掘りしていけば、大家さんと顔の見える関係を構築して、面白い発想を投げかけることで大家さんの OK を獲得できると思っていますので、そこにはもうアートに期待しかないですね。

自分が変わらざるを得ない状況になる

羽原 子どもの頃は、いろいろな変化に順応しやすかったような気がしますが、大人になると、自分が変わる

きっかけがあまり無いような気がします。先ほども常識が違うという話が出てきましたが、空き家を活用しようとする人たちが、空き家を接点にしてアーティストと話し合いをすると、皆さんすごくカルチャーショックを受けますよね。“屋根がある家より屋根が無い方を選ぶの？”みたいな驚きを経験されると思います。でもアーティストと話す“屋根は無いけれど、ここから見える風景がこのまちを切り取っていて良いんだ”とか“ここが昔

のまちの物語として重要なポイントだから、その物語を丁寧に掘り起こしたい”とか、すごくグッとくる動機を聞かされて、今まで全然気付いてないものを見える状態にしてくれたりするんです。そうすると、こっちも“屋根がないと困ると思っていたけど、無い方が良いんだ”と、自分が変わらざるを得ないんですよ。そういった自分が変わるきっかけが、空き家の周りには沢山あるってことですね。そこが空き家を語る時の面白ポイントだし、やみつきポイントだと思っています。

アート以外の専門家が関わると、アートの可能性が広がる

羽原 そして私はどちらかというと、ホスト側の皆さんの立場なので、今日ここにいる方々にぜひお伝えしておきたいのは、ホストとアーティストだけを孤独に戦わせないでくださいということです。先ほど、「いこいの

+TAPPINO」は高齢福祉課がお金を出してくれていますと話しましたが、アートに軸足を置かない専門家の方たちが関われば関わるほど、アートが社会と関われる範囲が広がっていると思っています。空き家はまちの機能として、福祉でも、教育でも、産業振興でも、いろんな接点があると思うんです。特に芸術分野ではない行政の方たちには、空き家を活用しようとしている人たちに対して、何に対してなら既存の制度で、特定の個人のメリットにならないかたちで、その人たちの活動を応援できるのかといったことを考えていただけたらと思います。そういったプレイヤー以外の方たちの応援があれば、その取組が持続可能になる道も開けてくるのではないのでしょうか。

一緒に盛り上がってもらえる環境を

立石 空き家を単なる家、あるいは個人の問題として捉えて距離を置くのではなく、空き家をもっと地域に開いてもいい私は思っています。その上で今私たちが持っている課題も含めて、私たちの暮らしと空き家がつながる部分を見出して、いろいろ深掘りしていくと、実は面白さや、皆さんも楽しめる機会が眠っているということが見えてくると思います。今日発表いただいた事例の未来にも、そういったことを期待したいと思っています。先ほど羽原さんから地域団体とアーティストが孤独に戦わないでくださいというお話もありましたが、今日出てきた話題もぜひ皆さんに面白がってほしいですね。そしてアーツカウンシルしずおかとしては、今日発表していただいた地域団体さんたちの活動を“ふーん”で終わら

せず、「面白いね」と一緒に盛り上がっていける環境をつくっていききたいと思います。

ここでちょっと、会場の方にマイクを向けたいと思います。

空き家活用は入り口が大事

Nさん いろんな地域で行政と連携しながら空き家対策をやっていますが、僕の経験上、空き家活用の最初の段階で、行政の方から空き家のオーナーさんに話をつなげてもらおうと、お話の土台をつくってもらえてきて、その先がスムーズになることが多いです。プログラムの中に森町もありましたし、会場に森町の担当課の方がいらっしゃるようなので、1つだけ質問してもいいですか。一般の不動産的な使い方ではない空き家活用を、空き家のオーナーさんに提案するに当たって、何か気を付けていらっしゃることはありますか。

榊原さん 森町職員の榊原です。森町では、「空き家・空き地バンク」という制度を設けていますが、そこに登録された物件は、やはり流通の可能性が低い物件や改修が大変な物件など、不動産屋が取り扱いにくい物件が多く、所有者さんが手放してしまっただけで相談に来ることがあります。以前は、必ず宅建業者を入れて登録する決まりでしたが、それだとなかなかうまくいかなかったため、今は宅建業者を入れなくても、所有者さんが良ければ、そのまま登録してもらっています。登録された物件を利活用したい方がみえた時に、私たちが仲介をすることはありませんが、話し合いに立ち合う対応をしています。利活用したい方の意向があれば一緒にお伝

えますが、私たちはあくまで、話し合いがうまくいくように側で見守って、なんとか空き家の利活用につながればと思っています。

Nさん ありがとうございます。僕が沼津で空き家対策に関わるようになった時に、沼津市役所にめちゃくちゃ面白い公務員の方がいて、その方から口説き落されて今の活動を始めることになったんです。やはり行政の方が意識を持って空き家対策をしている地域は面白いですし、入り口がちゃんとできるのいいなと思いました。

空き家活用を支援するためのワーキンググループ

立石 空き家活用を考える上では、行政の手続きや法律、地域との信頼関係の構築など、越えなければならないハードルがいくつもありますね。今後、アートによる空き家活用を進めるには、活用しようと思っている皆さんが挫折しないようにバックアップできる体制が必要になってくると思います。そこでアーツカウンシルしずおかでは、今回のモデルプログラムと並走して、「アートによる空き家活用ワーキンググループ」というものを立ち上げました。空き家活用の事例が増えることで、積み上がっていくデータやエピソードを、専門的に考察し、先行事例やノウハウとして転用できるようなネットワーク



を構築していきたいと考えています。今年は、山田さんに座長に就任いただき、まずは山田さんが日ごろ活動拠点とされている県東部で立ち上げました。メンバーには不動産や建設会社、金融業の方々、それから空き家活用に取り組むアーティストの方に入っていて、いろいろ話をしています。

山田 ワーキンググループのメンバーには、アーティスト支援に関心がある建設会社の社長さんや、温泉街の活性化にまちづくりの観点で取り組む金融機関の方など、本業からちょっと外したところまできめ細やかにサポートしている方々に集まっていただきました。本日会場にお越しの戸井田雄さんは、アーティストでありながら、熱海のまちづくりに力を入れている方ですし、いつもお世話になっている不動産の三好明さんは、使う側に対してきめ細やかなサポートをされています。

立石 戸井田さんと三好さんから、ひと言ずつ頂きたいと思います。

今だからできることをやってみたい

戸井田さん 熱海で活動しています戸井田と申します。もともと現代美術の作家をやっていたんですが、作るだけでなく、〈アートが根付くまち〉そのものに興味を持って、まちづくりに関わるようになり、空き家活用もやっています。もともと立体作品が専門だったので、空き家は題材としか見ていなかったのですが、よくよく考えたら好き勝手に作品をつくるだけでなく、もっとそこできちんとすることがあると気づき、空き家活用の可能性について考え始めました。もともと建築学科を出ていて、まちづくりも勉強してきたので、今なら昔みたいに好き勝手やる以上のことができるのかなと思って勉強会に参加させていただいております。引き続き皆さんよろしくをお願いします。



自分の立場だからこそできることで支援する

三好さん 株式会社マチモリ不動産の三好と申します。私は東京出身で、実は熱海に縁もゆかりもなかったのですが、ただのサラリーマンから今では熱海で不動産屋を自分で立ち上げるまでに至りました。私が一番びっくりしたのが、いわゆるクリエイティブ人材の方々が、屋根に穴が開いて全く使えない物件を見て“光が入る！”と感動して、そこから作品に仕立て上げるところを見た時ですね。正直、なんて人たちだと思いましたね。自分自身は全くアートやクリエイティブなことに関心も経験もなかったのですが、そこから自分が得意とする不動産に関する知識や、建築基準法、消防法、水道法、並びにそういった関連法案の知識、あるいは大家さんの事情を

知っていることなど、アート側にはない、自分の立場だからこそできることで、支援をさせていただきます。先ほど孤独にさせないとか、アートと関係ない人たちがつな

がるからこそその強さ、継続性が生まれるというお話がありました。まさにそのことを実感しています。自分ができることは本当にちょっとしたことだと思いますが、今回みたいなイベント、あるいはつながりをつくることで、少しでもご支援できればと思って活動させていただいています。よろしくお願いします。

いろんな人が関わるための〈関わりしろ〉と支援体制をつくる

立石 お2人とも、ありがとうございました。最後に何度も繰り返になりますが、私たちは空き家活用が、特定の担い手さんたちだけでやっていくものではなく、いろんな方々が関心を持って関わっていくべきものだと思います。その〈関わりしろ〉をつくることも大事ですし、関わりたいと思った人たちが安心してチャレンジできるための支援体制を整えていきたいと思っています。

アーツカウンシルしずおかでは、今後空き家活用に関する情報を発信できるようにしていきたいと思っていますが、この会場の中に、すでにアートによる空き家活用や、面白い空き家活用に興味を持ってくださった方々は、今後アーツカウンシルしずおかにぜひ相談してください。私たち自身が解決するわけではないですが、解決してくれるような人たちにつなぎます。また、今は県東部のワーキンググループですが、次年度以降、西部、中部、伊豆にもこういったつながりを広げていきたいなと思っていますので、ぜひ仲間になってください。本日はありがとうございました。

創造 トークス

2023.12.15 (金)

に

「空き家」を考えた

発行：アーツカウンシルしずおか
(公益財団法人静岡県文化財団)
422-8019 静岡県静岡市駿河区 2- 3- 1
グランシップ1F
TEL : 054-204-0059
FAX : 054-288-8180
E-MAIL : info@artscouncil-shizuoka.jp
WEB : artscouncil-shizuoka.jp

発行日：2024 年 3 月

編集：アーツカウンシルしずおか

執筆：p.6 ~ p.23 神尾知里

デザイン：桑田亜由子